

滋賀県東近江市の農村地帯や東日本大震災で被害を受けた地域などでご縁をいただいた、数々のご家族たちのかけがえのない“看取り”について、写真を通じて見ていきたいと思ひます。

感謝や別れを大切な人たちと交わしながら、命をまっとうしようとする。そんな「看取り」には悲しみだけでなく、充足感やエネルギー、生命のほとばしりのようなものを感じることがありました。死は単なる終わりではなく、命をつなぐ壮大なバトンリレーの一舞台であると教えていただいた気がしています。命は有限であり、且つ、受け継ぎ継承していくもの、と。

「生老病死」を、われわれは暮らしから遠ざけ過ぎてしまったのかも知れません。小学生へのさまざまな調査で2、3割の子どもが「命はリセットできる」「人は死んでも生き返る」と考えているという結果が出ているそうです。それは大人たちの姿勢を映す「鏡」ではないでしょうか。

地域の真ん中で、尊厳を失うことなく、自分らしく、歳を重ねて、生き切る——。そのようなことがどこの地域でも実現され、のちの世代にもいのちをつないでいけたら。

「家族として、あるいは専門職として、自分に何ができるのか」、「生きとし生けるものとして自分自身はどのように命をつないでいくのか」を、改めて考える機会にもなればと願ひます。

國 森

いのちをつなぐ

看取りの現場に想う

講師 國森康弘さん

くにもりやすひろ 写真家、ジャーナリスト。1974年生まれ。神戸新聞記者を経てイラク戦争を機に独立。アジアやアフリカなどの紛争地や経済貧困地域を回り、国内では、戦争体験者や野宿労働者、東日本大震災被害者の取材を重ねてきた。「あたたかで幸せな生死を伝えること」「いのちの有限性と継承性」をテーマに、近年では看取り、在宅医療、地域包括ケアの撮影に力を入れる。第22回けんぶち絵本の里大賞、2011年度上野彦馬賞など受賞多数。著書に『いのちつぐ「みとりびと」』（全8巻）、『ご飯がたべられなくなったらどうしますか？』（農文協、花戸貴司医師との共著）、『アンネのバラ〜40年間つないできた平和のバトン』（講談社）、『3・11メルトダウン』（凱風社、共著）、など。



京都駅中央改札口より徒歩12分

地下鉄五条駅8番出口より徒歩3分

聴講 無料

2015年8月10日 (月)

18時30分~20時30分 しんらん交流館2階大谷ホール
お問い合わせはしんらん交流館内 企画調整局 (TEL 075-371-9208) まで

ホールは自由席です。

当日は許可なく写真撮影や録音等をご遠慮ください。

ご来場の際は、公共の交通機関をご利用ください。